

岩佐さんのこと

田 中 桃 三

岩佐さんと私は、私が3年になり松戸へ通うようになった年に助手を辞任されているので、学部での接触はほとんどなかった。だが、私の娘が偶然岩佐さんの娘さんと中学1年のときに同じクラスであったことからお互いの住まいが近いことが分かり（約1キロ強）、お宅へ伺ったりしていた。そのうち花葉会が発足し、会合の帰路など一緒したことも多かった。

またそのころは清水基夫さんも近くに住まわれていたので、途中で？次会として飲みなおすこともあった。程よく出来上がった清水さんを岩佐さんと2人で自宅まで送っていくのだが、エレベーターのない公団住宅の4階までようやく連れて行くと、ドアのうしろで清水さんの奥さんがすごい形相で立っていられるので、二人ともほうほうのていで逃げ出したりしていた。もっともあとで奥さんにうかがうと、あれは清水さんをにらんでいたの、我々には感謝していたそうであるが。

ともかく岩佐さんは気配りの人で、お会いしても、お宅へうかがっても、あまり気を使われるのでこちらががえって恐縮するようなことも多かった。

このことは植物や図書に対しても同様で、対象に対して細部にいたるまで追求し、中途半端なことを嫌われたので、あのようなコレクションを作りあげたのではないかと思う。

岩佐さんがどうして園芸関係の道に入られたかはとうとう聞きそびれたが、岩佐さんの年代の方で小中学生時代から園芸関係に進むとされた方はよほどの奇人でなければならない。なにしろ戦中は庭園を掘り返してイモ畑にしてしまった時代なのである。終戦後も数年間は食料難で餓死者の話やら米よこせデモが頻発していた中で、よくぞ園芸学部の名前が残っていたと思えるほどである。それでも1950年ごろからは各地でバラ園の開設の話などがでてきたのであるが、いずれにしても強い意志がなければこの道には進めなかったと思われる。

岩佐さんはあのまま学校に残られて学問のほうに進まれても、一流の業績を上げられたことは間違いないことと思うが、種苗会社に入られて活躍されたことは、業界のために大変意義のあることであったと考えられる。

戦前から必ずしも社会的に高い評価を得ているとはいえなかった種苗会社を、近代的な企業に変革し、上場会社にまで成長させたのも、岩佐さんの力が大いに寄与しているのに違いがないと思う。

几帳面な性格の岩佐さんはその膨大なコレクションの整理に大変な努力をされていたが、なにしろ増加のスピードが速く、整理が追いつかない面があり、現在でもその全貌はわかっていない。しかし生前の岩佐さんはその抜群な記憶力で、頭の中では何時、どこで、だれから、いくらで手に入れたかを覚えておられたのは確かであった。

何回か講演をお願いしたり、また講演をきいたりしたが、そのたびに感心したのはその入念な下調べと、結果としての詳細なテキストの作成である。先年の花葉会総会での洋古書の展示のときも、数週間前には展示する本と開くページも決めてあり、それに合わせたアクリル板の大きさも図書別に特注で作り、万全の準備であった。

定年後の岩佐さんは結構忙しい日々を送っていたが、楽しみにしておられたのは奥様との外国旅行であったようだ。それまでは仕事で何回も外国に行っていたが、プライベートな旅行は本当に楽しいといっておられた。商売をはなれ、園芸植物のルーツをさぐり、ついでにグルメを楽しんでおられた。花葉会の旅行にも2回ほど参加されたが、同行の私たちもその豊富な植物の知識に感心したが、やはり入念な下調べの結果だったと思われる。

まだまだ行きたいところはあったようで、亡くなる1ヶ月ほど前にも、是非イギリスのチェルシーショーを見に行くのだとっておられた。

また長野県でダリヤ園の開設運営に尽力されたり、ダリヤ協会の事務局を引き受けられたり、これから御自分が好きな植物とゆっくり向き合っていられるつもりであったと思われる。

その他にも古いカタログのリストの出版など、遣り残した仕事は大変多かったと思われるが、なんといいてもその早すぎた死は、ご自身にとっても園芸界のためにも残念でならないことである。